

温古知新②5 南総里見八犬伝 6 1

笑顔礼讃西東

菜の花句会 様 (新潟市・東区) 2 3

円座むさしの句会 様 (東京都・国分寺市) 3 4

須澤重雄 様 (長野県・伊那市) 5

投稿作品 6 10

心に残った作品 10

詠み人スクランブル(年末年始によくしたお手伝いは?) 11 13

新潟ぶらり／メディアシップ さらの広場 13

お客様の「リレーエッセイ」 山形誠司 様 14

ニュースあれこれ 15

詠み人の「リレーエッセイ」 歌人北山あさひ 様 16

12
December
Vol.71

*
「喜怒哀楽」は、
文芸を楽しむ方々の
活力の源を目指し
(株)ミューズ・コーポレーション
喜怒哀楽書房が
隔月発行している
情報誌です。

喜怒哀楽

詠み人応援マガジン
詩歌俳柳壇ニュース

The 10th anniversary

温古知新②5

「南総里見八犬伝」6

前回、やつと八犬士全員が登場した「八犬伝」。
小文吾、現八以外の犬士の行方は……？

甲斐国猿石村を訪れた信乃は、村長宅に泊ま
ることに。しかし、大雪で足止めをくらいます。

この家には、かつての信乃の許嫁と同じ浜路と
いう名の養女がいました。ある夜、昔の浜路の霊
が乗り移った浜路が信乃のもとに忍んできます。
このとき、信乃の先祖と村長の先祖が主従関係
であったことが判明。

財産を目当てにしていた村長の後妻は、愛人
の武士と謀り、村長を殺して信乃を蔵に閉じこ
め、お上に村長殺しの犯人として訴え出ます。
眼代がやつてきて信乃と浜路を連れ去りますが、
それは道節が化けた偽眼代でした。甲斐国指月
院はゆえあって、大法師が住持を務めており、
犬士探索の拠点として道節もここにいたのです。
また、浜路が、かつて大鷲にさらわれた里見義
成の五の姫であることも発覚。浜路姫は里見家
臣に連れられて安房国に向かい、信乃と道節は
ともに旅立ちます。

一方、越後国小千谷を訪れた小文吾は、石亀
屋次団太の好意によって逗留。山賊・酒顛二の

妻になつていた船虫に襲われますが、珠の奇瑞に
よつて救われます。そこで、船虫を知らずに助
けた莊助と小文吾は再会。山賊を討伐したので
す。

二犬士は山賊討伐を聞きつけた領主に片貝の
城に招かれますが、城内で突然捕らえられてし
まいます。実は片貝の領主、籠大刀自の二人の
娘は武州大塚の領主大石家と武州石浜の千葉家
に嫁いでいたのでした。大塚で処刑されるはず
だった莊助と、対牛楼で馬加大記を討った毛野の
仲間小文吾は、罪人として処刑と決まります。

二犬士の首は大石家と千葉家から来た使者に
渡され、証拠の品として莊助の持つ名刀・落葉
がそえられました。しかしこれは偽首で、二犬
士の冤罪を知る片貝の執事・稲戸由充のはから
いにより救われたのでした。

大石家と千葉家の使者は信濃国下諏訪で、名
刀・落葉の切れ味を試すために足の不自由な乞
食を斬ります。仇を探すため乞食に身をやつし
ていた大阪毛野はすかさず仲間の仇をとりまし
た。そこへやつてきた莊助と小文吾。毛野の痣と
珠を確認し、里見家との因縁を話します。しか
し毛野は残る仇・籠山縁連を倒すまでは犬士の
仲間にはなれないと書き残して立ち去ったのでし
た。

出会っては離れ離れになる犬士たち。次回、無
事再会できるのでしょつか……？

(古川久美子)

菜の花句会

(新潟市・東区)

地元、新潟市は東区の石山地区公民館で行われている「菜の花句会」は、9年前、公民館主催の「俳句道場」の受講者が母体となつてできた会。指導にあたるのは、永年新潟大学で植物病理学を教えておられた小島岳青さん。「いつでも気軽にのぞいてみてください」の一言で、11月18日、会社から車で20分、ふらりとお邪魔してきました。

兼題や席題はなく、当季雑詠7句投句の7句選、うち一句を天に選びます(小島さんは10句選)。約2週間前に新潟の県北、奥胎内や瀬波に1泊の吟行をされたということで、その際に作った句をさらに磨きあげた句も出されていました。



▲ざっくばらんで白眉がトレードマークの小島岳青さん

梟から朝を引き継ぐ古墳守 渡
サラリーマンをしていた頃は、転勤で1日、2日で仕事の引き継ぎがあった。夜が明けて、前任者の梟から朝を引き継ぐ、という表現が非常に気に入った。

神在の出雲の国の繩のれん 岳青
神様と一杯やって、さぞやいい旅であつたらうと(笑)。

岳青：全国の神様が集まる出雲に、越後の田舎者の神様も出かけたがどこへ行っていいかわからず、繩のれんをくぐつたというふざけた句。

天高し歩荷のたましひ尾瀬背負ふ伸一
岳青：オーバーな表現にも思えるが、何十キロと背負って歩く歩荷の姿は尾瀬そのものを背負っていると表現する、山男の伸一さんならではの句。「たましひ」は評価が別れるところ。

伸一：先日、歩荷を取り上げたテレビ番組を見たが、あの歩荷がいなければ尾瀬を訪ねる人の胃袋も満たすことはできない。歩荷の魂というか、使命感を見る想いがした。

※歩荷^{ほりか}山のような体力的または地勢的な難所において、人が背中に荷物を背負って徒歩で運搬すること。また、それを生業とする人。《季語夏》

石路活ける母在れば今日百歳に 悠子
岳青：母ものに弱い私は、必ずこういう句は採るわけで(笑)。花が薔薇だと話にならないが、「石路」としたこと、今時分のひんやりと、しかも凜とした黄色が母のおもかげに重なる。母



▲短時間で91句を書き写し選をします

に對する愛情、思いやりの気持ちがいっぱいつまった句。石路が活きている。

蔓ひけば零余子こぼるるひとかたけ 紀久子

岳青：所作は非常に簡単で、たぐった蔓から取れたむかごが、一片^{ひとかけ}食分。「ひとかたけ」が言い得て妙。ほんのわずかなむかごが採れた、それで満足したという秋の句。

冬落暉瀬波を納め佐渡納め 渡

瀬波に泊まりそっくり同じ経験をしたことがあるので懐かしくていただいた。岳青：この前の吟行句を渡さんは一晩考えて直したのをみんな知っているから誰も採らなかつた。やりましたね、渡さん(笑)。

選者：私、吟行に行かなかつたから新鮮にうつつちゃつた。

渡：先生、あのとき推敲して出し直していつて言つたじゃないですか(笑)。

憂きことのつや二つ小鳥来る わこ
岳青：誰にでも憂きことのつや二つはあるが、句にしようとするとなかなか容易ではない。季語に何をもつてくるか、いかにも秋の庭の小鳥と合っている。大したことを言っているわけではないが、シンプルで分量がいい塩梅。

波郷忌や切字のごとき霜柱 岳青

波郷に詳しいわけではないが、「切字のごとき霜柱」のフレーズがとてもいい。

天空の「く」の字ほどけて鳥渡る わこ

新津の秋葉公園の方に行くと、よく空に白鳥が飛んでいるが、まさにくの字になつたり、ほだけたり、またくの字になつたりという情景を見る。

彩りを容赦もなしに時雨けり 伸一

岳青：先日の吟行の2日目は、前日のあれだけの紅葉が一気に散つてしまつた。その時のことと重ねて読ませてもらった。

文化の日居酒屋兆治のドラマ観る 春雪

岳青：誰も採っていないが、のんべえはこういう句がすぐ目につく。もう少し何とかならんかな、という感じもするが(笑)。文化の日というと、格調高いことを言いたがるが、居酒屋兆治のドラマを見ているという、おかしみがある。春雪：主人公が文化勲章を貰つたので。岳青：文化だからって、いつてもないでもないで(笑)。

深空なる林檎の紅と握手せり 渡

岳青：山の雪と真っ赤なりんご。深空



▲みなさん、とてもいい笑顔です

で美しさが増幅されたその情景を「紅と握手せり」とはうまい表現。りんごとの愛情交感、コミュニケーションを感じる。信州のりんごを思っ採った。

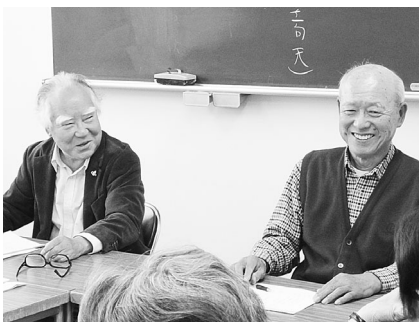
寝高なき母の寝息や神の留守 典子

お母さんの安らかな寝息と、神の留守がうまく合致して静謐な様子を醸し出している。

亡き人の癖字の日記菊人形 綾子

短冊が回ってきたとき、すぐに特選にしようと思った。菊人形が効いて綾子さんの実感がこもっていて、涙が出そうだった。

岳青：誠に心打たれる、文句なしの特選。俳句の形も整っていて、こういう俳句をきちんと亡き人に届けるといふ、その確たる自信。癖字がとてもいいし、菊人形で救われている。これ以上しんどい季語だと参っちゃう。今日は、久しぶりに句会にお出掛けいただいて本



▲同級生同士もいて、笑いの絶えない句会でした

当によかった。
綾子：3年日記だから、以前書いたものも見える。一昨年には菊人形を見に行っていたんだな、と。

他、共鳴句

少年の顔も受くる零余子かな 羊子
濁り酒封切の家へ帰りけり 紀久子
この舌はまだ衰えず新走り 渡
錦秋の風の中から歩荷来る 春雪
抱くよにつき離すよに鳥渡る 美季
寒き朝新聞受に有難う 辰之
秋色を落暉に託し油壺 佐貴

★難しい言葉を使わず、すーっと心にしみる俳句だなあと感じるのは、同じ土地で生活している故でしょうか。皆さん何食わぬ顔で淡々と進めておられました。短時間の間に手も頭も口もフル稼働。鍛えられているんですね。そして、生老病死、どのような渦中にあつても、またここに戻ってくる、来たいと思わせる場であり、それを支える俳句の力を感じた新渇らしい実直で飾らない方々の集まりでした。(木戸敦子)

円座
むさしの句会

(東京都・国分寺市)

名古屋を拠点に創刊3年が経つ『円座』。東京は国分寺市にある中川肇さんの「或るギャラリー」において、毎月一回「円座むさしの支部」の句会が開かれていた。11月4日は年に一回、武藤紀子主宰がお見えになるということ、そして「木戸さん、終わってからお酒やご馳走があるから！」の言葉に魅かれ、いそいそとお邪魔してまいりました。

様々な本や自作のポストカードが所狭しと並ぶこは、まさにギャラリー。ご近所の方や、退院間もない方、武藤主宰目当てで遠く岐阜から遠征して来られる方など、実に様々。
本日は11人の出席で、兼題「山茶花」「鹿」「どぶろく」の3句出句で5句選、うち1句を特選として選びます。
選句・披講が終わると、各人が特選に選んだ句に限らず感じたことを講評します。

武蔵野の草風呂ぬくしにぎりさげ多恵
よくわからなかったが「にぎりさげ」と「草風呂」が離れていておもしろいと感じた。薬草風呂のことかな？
多恵：かつて武蔵野台地では、朝に草を刈つてそれを小屋に積んでおくと、朝露の湿気が暖まりその草をお風呂代わりにした。その風習を詠んだ。

中川：サウナみたいだね。それで草が暖まってぬくしなんだ。

武藤：京都の西北、柚子の里の草風呂だと思った。「ぬくし」と「にぎり酒」は同じゆるゆるとした感じがするので、季語としてどうか。季語を合わせる時はシビアに合わせる。同様のテイストで合わせると軽くなるが、「武蔵野」が効いていて入選に。



▲前日から東京入りし、お好きな歌(カラオケ)と麻雀を堪能した武藤主宰

山茶花や二つ並べて干さるる傘 康子
武藤：「や」でもいいが、これは、山茶花に二つ並べて干さるる傘、としたうえで採りたい。「山茶花や」と大きく切ると、皆さんいいように思うかもしれない。でもこの場合「や」とすると山茶花が画面全体に出て、少し離れたところに傘が並んでいるというイメージ。それでもいいが、そうすると山茶花の垣根が見えてきて、広がった山茶花に二つ傘が干してあつてもいいとは思えない。面ではなく、大きな一本の山茶花に赤い傘が並んで干してあつたら絵画的にとってもいい。採る人の好みだが、俳句は読む側のもの。選者は読む側であり、私の好みで採らせていただいた。



⇄ 静から動へ、同じテーブルが一瞬で様変わり



の冬一番に咲いたということ。句として無駄なものがなくすっきりして美しく、気持ちがいっしょに入り入っている。素直なすっとした気持ちが詩形に現れている。ただ、贅沢をいえばわかりやす過ぎる。

かたはらに形見の句帳濁り酒 もも子

武藤：夫とか割と近い人、その形見の句帳を見ながら一人濁り酒を飲んでいる。何も言わず、ただ飲んでいる。そこにぼつんと置かれた句帳。言葉を尽くしてあれこれ言ってみたり、奇をてらつて破調にしてみたりもするが、こういう句をみると究極は五・七・五だなということがよくわかる。単純に誰かがわかり、しかも形が整っているものには勝てない。何でもそうだが、その世界の基本は本当に大切だということ。すばらしい句。

どこにでも座りどこでも濁り酒 誠一

武藤：前の2つに比べればわかりにくい句。濁り酒を飲むときは、ちゃんとした椅子に座って飲む必要もない。草っ原でも、ベンチでもどこでもいい、その自由さが濁り酒にはある。2つのどこでもは、同じではなく、後の方はめでたい席でも、お祭りでも、どんな場面にあつても濁り酒は似合うという、複雑なことを上手く言っている。

武藤：みんな特選に採られると「ありがとうございます、先生だけがわかつてくれて」と、大変喜ぶが、肝心なのはたくさん点が入ったのに先生が採らなかつた場合。なぜ採らなかつた

のかを考えないと。点がたくさん入ったから良い句なのではない。そんなことで喜んでいたら大間違い。
中川：それにしても、今日和子さんすごく点が入ったねー。
和子：だから先生が今、言われたじゃないですか、点の数は関係ないって(笑)。



★その後は手慣れたもので、食器とお猪口、そして各人持ち寄りのお手製のおかずの数々が手際よく並べられる。本日の兼題「濁り酒」をはじめ、酌めども尽きぬお酒と俳句談義に、ギャラリー内はまさに「山笑う」の様相。楽しくて好きで探究していることを仲間とともに学び合い、時にご指導いただき、目いっぱい学び、お腹いっぱい食べ、胸はいっぱい大満足。終わってしまうのが惜しいほど、五感で満喫した楽しい時間でした。
(木戸敦子)

近況は聞かず終ひや濁り酒 和子

濁り酒を飲むのに夢中になって、近況も聞かないで終ってしまったというおもしろさ／相手を気遣って聞かない場合と、楽しくてうっかり聞き忘れたという場合と、いろいろ想像できる。
武藤：気を遣って聞かないほうだと思ふ。言いたいことを読み手任せにしているところが少し物足りない。

山茶花はひそか指先冷ゆる頃 多恵

武藤：寒さの微妙な感じが出ている、しゃれたすてきな句。「ひそか」という言葉自体は、「ひそか」ほらいいでしょ、という気持ちがあるのを見て俳句には向かない言葉だが、この場合は許せる。なぜか。指先冷ゆる頃の、かすかな寒さを味わうためには「ひそか」の微妙な味わい。

宅急便源爺からの今年米 良江

武藤：源爺がかわいい。でもなんでわざわざ「宅急便」を入れるの。クロネココマトの顔が浮かぶじゃない(笑)。「源爺からの今年米」で十分で、そこを浮き立たせるような何でもない言葉を入れる、それが俳句、腕の見せ所でしょう。

山茶花や午後軽やかに始まれり 道夫

病を得、大変だったと思うが、ようやく歩くことができたという、その喜びが「軽やかに」に載ってよくわかる。

◎主宰特選3句

まつ先に父の山茶花咲きにけり もも子
亡くなった父親が愛でていた山茶花が真っ先に咲いたという句。

武藤：この父親はたぶんもういなくて、その父が大切にしていた山茶花が、こ



▲飲みながらの俳句談義、至福の時間です

画家 須澤重雄様

(長野県・伊那市)

喜怒哀楽紙上の挿絵でおなじみの須澤重雄さん。今回同封した新しいポストカードのシリーズを展開するにあたり、長野県は伊那市にあるアトリエにお邪魔しました。

「今、個展の準備でここんこんにやられているところで」の第一声に続き、「さあ、どうぞ座って」と、茶釜から入れてくださった本格的な抹茶で一服。お昼どきだったこともあり、その後はお手製のおでんと、ビールにワインに日本酒、お寿司、フルーツと歓待いただく。



▲「描きたいものがたくさんあって、あと200年あっても足りないよ」と語る須澤さま

来し方

北アルプスの麓、馬が農耕の主要手段という自然いっぱいの高家村（現在の安曇野市）で生まれた須澤さんは、3、4歳の時から絵を描くことが大好きで当時は「のらくろ」をよく描いていたとか。農民画家と言われた叔父と彫刻家だったもう一人の叔父の影響もあって、中学では既に画家になると決めていた。

両親は医者になってほしいと希望していたが、高校卒業後は「東京に出て日本の国をなおす医者になる」と言うて、武蔵野美術大学へ。藤井令太郎氏に師事し、文化国家をつくる一助になりたいと精力的に活動し、在学中に国展初入選を果たす。結婚を機に伊那に居を構え、日仏現代美術展に入賞すると、その資金で渡欧。フランス、オランダ、スペイン、ポルトガル、イタリアで見聞をひろげ勉強を重ねた。マティスに代表される感情を色彩で表わす「フォーヴィスム（野獣派）」に感化され、「よし、俺たちも！」と「野獣」という会を立ち上げ、若い人たちを育てる活動に奔走、若くして県展の幹事長を務めるなどした。

当社とは

最初は、当社でお手伝いした句集に手にし、その感想をお寄せくださったことがきっかけ。ご自身の絵のポストカードをお送りいただいたこともあり、このような絵を喜怒哀楽紙上に掲載できたら……！と、恐る恐るお願いしたところ、快くお受けくださった。

描くこと

「油を使うから油絵で、墨を使用するから水墨画。私のなかでは全部一緒で、野球のキャッチボール同様にデッサンが絵の基本。デッサンとは、表面的な美しさではなく、その物の形や色の中にある本質を描き取ること。大げさに言えば、キャンパスは一つの小宇宙。森羅万象の中には必ず宇宙の法則があり、その本質的なものは何なのか、それを追求するのが絵画。でも、最初は絵を描くことは楽しいな、そこから始まる」。



▲「冬シリーズ」を皮切りに一年で「春夏秋冬」を完成予定です。詳細はP15を！

●須澤重雄さまプロフィール

- 1936年 信州安曇野生まれ。武蔵野美術大学卒業。藤井令太郎氏に師事し、在学中に国展初入選。
- 1958年 読売アンデパンダン展に参加。
- 1975年 日仏現代美術展に入賞し、渡欧。
- 1986年から 県展幹事長を歴任し、88年、伊那美術協会会長を務める。
- 1992年 四万十川記念賞
- 1994年 国際交流美術展（ニューヨーク）で優秀賞を受賞以来、国際展でも数々の賞を受賞。
- 2003年には 元陽展文部科学大臣賞を受賞。現在、日本美術家連盟会員、伊那市在住。



▲「油絵の濁った色が大嫌い」と仰るだけあって、どの絵も鮮烈な独特の色使い。「いくら塗りたくっても、必ずしもよくなるとは限らない。化粧と同じだよ（笑）」

▼現在「長野日報」の挿絵も担当



★大ぶりのガラスの花弁に活かされたローズマリーが、窓から射す光に輝いている。花梨の上に、慈しむように横たえられた蜻蛉の亡骸、その黄色と黒のコントラスト。若いころに作ったブローチや彫刻の数々、水墨絵の描かれた団扇、携帯電話のケース……。アトリエ全体が、須澤さんの中を通り、その手を通して生み出された物々から成る小宇宙だった。（木戸敦子）

●須澤重雄絵画展

平成25年12月3日～12月28日
上伊那郡南箕輪村南原
9799-22
コーヒー&ギャラリー
「なごみの樹」

●第11回「漸進展」

平成26年1月9日～1月13日
伊那市荒井区通り町3500-1
伊那市生涯学習センター
2階ギャラリー

投稿作品

短歌

※誌面の都合上、投稿作品の掲載は先着300名様までとさせていただきます。何卒ご了承ください。しめぎり2014年1月17日まで
※作品は原稿どおりに掲載しております。

- 1 水のいろ風のいろに触れながら川原ゆ
けはしゃがみたくなる
由布みづ紀(神奈川県)
- 2 生きて来てあつと言う間に七〇年何
をしたかともまどいている
武田東洋一(山梨県)
- 3 セピア色に枯れてみだるる休耕の畑
に野分音たてて吹く
緑川葉子(福島県)
- 4 修正液つきしジャンパーを仕舞うとき
わくさびしさはみずからのもの
田中要(新潟県)
- 5 雨止みて諏訪湖を跨ぐ虹二つ蓼科山の
風わたるくる 石尾曠師朗(東京都)
- 6 今は亡き父母の面影重なりておぼろ
に見ゆる仲秋の月
渡部美代子(山形県)
- 7 いたみある人參箱よりとり出して捨
てるか活かすか迷ふ日の暮れ
佐々木都(長野県)
- 8 伊藤園審査に残るクナシリの盗句疑
う悲しい係 早坂絃司(北海道)
- 9 過熱した前評判の所為なりや村上春
樹また涙呑む 大竹憲弥(新潟県)
- 10 汚染水の先行見えず立ち並ぶ貯水タ
ンクは五年の寿命 桑原謙一(群馬県)
- 11 まだ青きおなもみ一つつけてみる黒
きセーター左の胸に
待元明子(兵庫県)
- 12 越路来て魚沼産のにぎり食べ妻へみ
やげの笹だんご買う
藤原昭三(滋賀県)
- 13 「グランプリ」清流めぐる利き鮎会四
万十水系は脂のりたり
西山悌三郎(高知県)
- 14 おみなえし吾木香に藤袴抱いて帰る
誰にか見せん 高橋邦子(高知県)
- 15 東京オリンピック「心のデフレ」の脱却
を我れそれを見て百歳迎ふ
今井忠一(東京都)
- 16 悪しき事続きし日本にもたらせる世
界遺産は富士の山なり
高須孝(愛知県)
- 17 幼きより涙もろき吾なりき母亡くし
し日重ねておもふ
黍嶋金平(愛知県)
- 18 聖書よむ声流れくる教会の垣根の下
にホトトギス咲く
篠原三郎(静岡県)
- 19 漏れる度濃度の上がる汚染水プロッ
クしてると総理は云ふが
黒澤正行(福島県)
- 20 春・夏にわけて瀬戸内芸術祭舟も小島
も人の溢れる 佐伯セツ子(香川県)
- 21 読みごたえありてすばらし編集の喜
怒哀楽に感動礼讃 栗原清 埼玉県)
- 22 秋の空風に吹かれし遊歩道どこに居
るやらせみの泣き声
浅沼正子(神奈川県)
- 23 隠れ宿よりいくほどもなき寺の裏信
玄の古井戸そと覗けり
土屋喜雄(山梨県)
- 24 夢叶い求めし畑の初収穫我が手で宅
配自慢話添へ
音喜多千津子(埼玉県)
- 25 喜寿の友マラソン走る写真にて勇気貫
いて観てゐる秋日 小暮昭司(群馬県)
- 26 夜更けやみ身振り唸り夜越えて降積
む雪寂か耳に届かず
濱田深雪(新潟県)
- 27 素人の野菜育てもなんとやら越冬仕
度と今は齷齪 田中豊恵(新潟県)
- 28 自転車を自宅の前で盗まれて腹だた
しやら嘆かわしいやら
新井賢(埼玉県)
- 29 次々とピアノ独奏出番待ち暗譜する
子等の瞳輝く 石原千江子(群馬県)
- 30 上州の全山眺む屋根の上患者の衣料
白くはためく 村岡盛英(群馬県)
- 31 老人ホームの入園許可証佛壇に置き
て亡夫の言葉待ちある
佐伯はる(奈良県)
- 32 夕間に我が家の明かり点りいて待つ
人あるを幸と思えり
冷水發子(千葉県)
- 33 わくわくと「喜怒哀楽」をひもときて
恩師の短歌見つけ嬉しき
矢島多恵子(東京都)
- 34 隣室の癌の患者は夜の静寂妻を呼び
ついで「死にたくない」とふ
梁瀬龍夫(山形県)
- 35 陽の沈み静けき里の毘陽寺に梵鐘響
く秋の夕暮 関子利明(兵庫県)
- 36 放送の隠密奥の細道に詠まれる俳句
今日も楽しや 濱田イサオ(福岡県)
- 37 娘を二人嫁がせたのに嫁一人娶れぬ
不幸なげく姫は 下山信行(群馬県)
- 38 父二十三回忌台風それで子等も遠く
より 佐野澄江(山梨県)
- 39 宇宙まで歩いてみたい万歩計
森恒雄(愛知県)
- 40 婆翁が園児と懇う笑い戯
三宅得三(新潟県)
- 41 節電へネオン看板派手すぎる
小西忠夫(鳥取県)
- 42 退院の妻へ布団を掛けてやる
竹村穂夫(大阪府)
- 43 豆靴をずらり並べて孫曾孫
大江秋月(兵庫県)
- 44 好きな栗皮の固さに負ける老い
大岩歌子(岡山県)
- 45 敬老会平均寿命を忘れてる
野田明夢(新潟県)
- 46 めでたさもこの上はなし10並ぶ
石原岳(群馬県)
- 47 酌み交わし社長蹴落とす策を練る
佐藤朗々(東京都)
- 48 「紙」あらば「機器」がなくても生きら
れる 安木沢修風(新潟県)
- 49 大皿に笑顔もそえる母料理
諸橋文男(新潟県)
- 50 誰の芝浜を聴こうか年の暮
丸山芳夫(東京都)
- 51 ピカドンと今だに語る傷のあと
羽田桐柳(群馬県)
- 52 おいそれとボケてなるかや認知症
工藤昌見(山形県)
- 53 じいちゃんの手料理能書が多い
木村誠一(神奈川県)
- 54 両親に詫びるつもりでボランティア
細川光子(栃木県)
- 55 ゴキブリを親の敵にしてしまふ
大森一甲(兵庫県)
- 56 妻守る腕がだんだん細くなる
奈倉楽甫(愛知県)

川柳

- 57 古い背負い静かに過去を振りかえる
鈴木義雄(福島県)
- 58 我慢した抗癌治療でいのち尽き
守屋高雄(岩手県)
- 59 ヘルプミー聞こえるように独り言
岡本恵(茨城県)
- 60 百合の香やすべて明日のことにする
松尾健二(千葉県)
- 61 首相所信威勢よすぎ心配だ
原崇雄(埼玉県)
- 62 愛してるなんて言うから眠くなる
石神紅雀(鹿児島県)
- 63 銀河への列車を予約して眠る
安田翔光(香川県)
- 64 ちちははよ よめよと盆の灯がゆらり
藤井北灯(福岡県)
- 65 ああ面白かった今年無事終える
小山恵美子(大阪府)
- 66 誉め言葉ばかりで語る君のこと
奥田音野(香川県)
- 67 大好きな人がたくさんいて困る
春田あけみ(鹿児島県)
- 68 亡き母の杖が心の支えする
竹森桂子(香川県)
- 69 捨てるより修理しようと砥いでいる
藤井碩子(山口県)
- 70 秋祭り終れば元の過疎の村
藤沢健二(千葉県)
- 71 金婚を独りで祝う酒温め
久本にい地(岡山県)
- 72 法師蟬字余り字足らず句またがり
岩崎政弘(岡山県)
- 73 何かあるその優しさが気にかかる
山口千鶴子(東京都)
- 74 美男美女恋のつづかぬ週刊誌
青木日出男(群馬県)
- 75 安らかな寝顔浄土へ向かう母
中嶋秀次郎(埼玉県)

- 76 欠席の誰もが孫の運動会
石原惟夫(埼玉県)
- 77 この国の元首相らはよく喋る
嶋田征次(東京都)
- 78 あと七年米寿ガンバレ夢ひらく
尾形時栄(静岡県)
- 79 励ましの言葉より今抱きしめて
井上美恵子(愛媛県)
- 80 酒飲み喜怒哀楽の上戸あり
橋本世紀男(東京都)
- 81 来る年へダークホースの蹄研ぐ
近藤富夫(東京都)
- 82 背なの子がぐつすり眠る遠花火
坂元正憲(東京都)
- 83 並んでも並ばなくても逝くあの世
武田さとし(宮崎県)
- 84 点滴のポトリポトリと命水
出井静枝(三重県)
- 85 リンゴ狩り大玉リンゴ丸かじり
阿部澄江(宮城県)
- 86 生かさされて傘寿の祝いデラックス
柳澤京子(宮城県)
- 87 若返る気持にさせたある出逢い
近藤はつみ(福岡県)
- 88 夏過ぎて台風一家暴れ出し
大橋絵代(千葉県)
- 89 八十路の翁も母の日母思う
原田英一(千葉県)
- 90 熟女ほど時間をかけるメーカーキャップ
山崎一嘉(愛媛県)
- 91 満点を取らぬ余裕がベンにある
田澤宏(新潟県)
- 92 老いて見て一日大事考える
松田義登(福岡県)
- 93 天高く財布はやせるところまでも
菅原和子(茨城県)

俳句

- 94 除染土の土に戻れぬ霜の声
落合敏子(北海道)
- 95 一行で足る置手紙月今宵
環順子(東京都)
- 96 谷戸の家毬焼き秋を収めけり
津田忠彦(岡山県)
- 97 年の瀬や過ぎし日感謝老夫婦
延原令岱(岡山県)
- 98 波郷忌の紅葉を映す池の面
伊東修愚(静岡県)
- 99 柿熟るる今年も空家そのままに
鈴木岑夫(千葉県)
- 100 長き夜を引留ながら書紀を読み
山本善輔(兵庫県)
- 101 一村を銀座となせり防蛾灯
坂本千代香(岡山県)
- 102 知り初めし頃に戻りて深い空
松田重信(埼玉県)
- 103 秋冷の風が研ぎ出す近江里
乾久子(滋賀県)
- 104 現し世に一粒の露転びをり
橋本良子(埼玉県)
- 105 晩年に形而上学冬ごもり
菊池シュン(青森県)
- 106 神南備の山ふところや豊の秋
野木宗信(奈良県)
- 107 神仏おらが毒見の今年米
吉川伸生(福島県)
- 108 ゆつたりと小春日和を遊ばむか
大谷茂(埼玉県)
- 109 鯛雲のりて世界の街観たし
檜山とり子(東京都)
- 110 落日の矢切の渡し雁渡る
福山三智子(東京都)
- 111 遷御なる素木香るや伊勢の秋
近藤薫也(千葉県)

- 112 遠望を遮る大樹葛紅葉
渡邊碧海(静岡県)
- 113 野菊道伊藤左千夫の心地する
土谷敏雄(秋田県)
- 114 子や孫と三年ぶりの秋彼岸
江口肇(福島県)
- 115 所により雪降る予報冬近し
大橋恒次(新潟県)
- 116 ブーメラン秋をとらえて風と来る
大塚徳子(埼玉県)
- 117 天窓の部屋青白き十三夜
天野直子(神奈川県)
- 118 明日あると信じて消すや夜長の灯
今井勝子(新潟県)
- 119 冷まじき星のマークの忠魂碑
炭崎博(滋賀県)
- 120 ひととはけの風を伴ひ秋の山
須田洋子(埼玉県)
- 121 廃校に空缶一つちちる鳴く
佐瀬千恵(神奈川県)
- 122 園長の次々泣かせ鬼やらい
美濃部紘三(新潟県)
- 123 揺れたくて風を呼びけり秋櫻
磯部力(新潟県)
- 124 この海を汚染ベクトルぞろ寒
菅井文男(新潟県)
- 125 老いの道ころ走れど体こぬ
河合ヤスエ(大阪府)
- 126 回送のバスを包みし夜寒かな
望月喜美子(静岡県)
- 127 隠君子お吉は辛ろうございます
椋本望生(大阪府)
- 128 菊人形胸の中まで覗かれる
北村純一(神奈川県)
- 129 びりの子の無心の走り運動会
長峰正晴(千葉県)
- 130 花虎の尾円形花壇入口に
居原田連星(大阪府)

投稿作品



- 131 あの星は母笑っている
辻升人(東京都)
- 132 十年を見つめて咲けり秋桜
若月理依子(新潟県)
- 133 十月の灼けつくひと日暮れかかる
小形さだ(東京都)
- 134 おしやべりな弟メタボ馬肥ゆる
福田和子(東京都)
- 135 冬ざれし一握の灯や故郷なる
澤雅子(大阪府)
- 136 諸粥の甘味を活かす小塩かな
千代田俳徒(東京都)
- 137 マニキュアのきらりと光る秋日和
増島淳隆(東京都)
- 138 拝殿を掃く巫女あり神の留守
田野倉訓郎(東京都)
- 139 喜びも秋思もありて生かされて
井原毬子(東京都)
- 140 芳しや熊野古道の葛の花
星野三興(新潟県)
- 141 まんねん茸今更探す親不孝
小島岳青(新潟県)
- 142 月の夜に螢袋よ顔上げな
中高純子(新潟県)
- 143 星月夜宇宙遊泳する胎児
川口襄(埼玉県)
- 144 自転車に梨の一箱風の中
竹本美美子(新潟県)
- 145 野仏に何をささやく赤とんぼ
中垣郁代(福井県)
- 146 花芒に似合ふ景色やささえ堂
大塚正路(福島県)
- 147 鳥威し人もおどろく一発目
青木涼子(埼玉県)
- 148 十三夜首を斬られて五十四年
沢田稲花(山形県)
- 149 共に老い即かず離れず大公孫樹
内河邦久(東京都)
-
- 150 朝顔の種のこぼれて垣根解く
副島加代子(宮城県)
- 151 十五夜のうさぎ飛び出す余震かな
鈴木与平(宮城県)
- 152 津波あと残る漁港に若布干す
鈴木蝶次(宮城県)
- 153 空碧く二重の山の粧ひけり
小井寒九郎(三重県)
- 154 命より重きものなし桐一葉
石井美智子(埼玉県)
- 155 迎へ火やかすかに父の咳ひひ
高松ゆか(神奈川県)
- 156 かあさんの迎へに来る月の夜
高松愛(神奈川県)
- 157 葉鶏頭静かに佇ちて光りけり
樋口二葉(三重県)
- 158 みちのくへフクシマ想いひとり旅
島口健次(神奈川県)
- 159 凱施門くぐれぬ神馬肥ゆるかや
矢野絹枝(東京都)
- 160 男なら黙って耐える吾亦紅
山崎吉晴(群馬県)
- 161 姉逝きぬ今日もしきりに木の実降る
高崎登喜子(東京都)
- 162 鎌倉に集うOB紅葉かな
花塚三郎(千葉県)
- 163 とりあへず今日一日を十二月
阿部至(埼玉県)
- 164 負けるなよオスプレイなんぞ鬼やん
ま 吉村充治(埼玉県)
- 165 富士箱根鴨の看経見守りぬ
吉里ひとみ(東京都)
- 166 木犀の香りただよう路地の闇
堅田秀子(東京都)
- 167 採血の上手なナース小鳥来る
竹内ハヤ子(埼玉県)
- 168 画室にて山茶花をみる昼下がり
須澤重雄(長野県)
-
- 169 心まで老いてはならず今朝の冬
青木ケン子(埼玉県)
- 170 生け垣の内に外れて熟柿落つ
塚田寿子(埼玉県)
- 171 間引菜のどれも優劣つけがたし
井上静夫(栃木県)
- 172 美術館出でて色なき風の中
澤智恵(神奈川県)
- 173 銀木屋生老病死の苛酷なる
長野光康(神奈川県)
- 174 まだ青き木の実肩打つ男坂
宮崎敏昭(埼玉県)
- 175 平凡に生きる暮しや実むらさき
道給一恵(埼玉県)
- 176 我もまた闇を見つめり白桔梗
関原幸子(東京都)
- 177 秋ともしたがひの皺を笑ひ合ひ
國分水府郎(茨城県)
- 178 秋晴や背中で踊るランドセル
中島さつき(奈良県)
- 179 異国語も揺らすつり橋紅葉狩
長居美弥子(北海道)
- 180 糟糠の妻に口開け新酒注す
寺内信(埼玉県)
- 181 鈍行で落ちて行きます流れ星
早乙女文子(埼玉県)
- 182 人知れず心に宿す秋の月
堀田寿美子(北海道)
- 183 名は幽雅はぢらふやうに式部の実
岡野智恵子(埼玉県)
- 184 秋深しいつしか吟ず田原坂
古谷力(東京都)
- 185 蔵王嶺に片足を置く秋の虹
小野正光(宮城県)
- 186 木犀の匂ひに酔ひて躓けり
三津木俊幸(千葉県)
- 187 去りがたしまた来ることのなき花野
堀木和子(大阪府)
-
- 188 園児らの会話ちぐはく鯛雲
倉田淑子(千葉県)
- 189 福だるま夫の笑顔のまんまかな
鷺谷浅子(茨城県)
- 190 初鳩を芝の日向に数えきれず
川崎貴行(熊本県)
- 191 シベリヤの白さをまとい白鳥来ぬ
白岩賢次(福島県)
- 192 秋惜しみをれば野点に誘はれし
山東爺(北海道)
- 193 頼りなきものに言の葉秋ざくら
川崎洋吉(福岡県)
- 194 茅葺きの暖簾くぐりてとろろ汁
杉原明子(静岡県)
- 195 秋あかね生れし棚田へ里帰り
坂山陽康(滋賀県)
- 196 大原女の脚絆に釣瓶落しかな
山本直子(大阪府)
- 197 見慣れたる空家の庭の秋桜
佐々木典子(宮城県)
- 198 一の雁二の雁に次ぐ子連れ雁
田島星景子(宮城県)
- 199 木漏れ日に水引の花紅さえる
水落重式(新潟県)
- 200 コンビニへ満月こっそりついてくる
有田裕子(北海道)
- 201 箒の目正しき庭の神無月
佐藤英洋(東京都)
- 202 あるはずの席空しくて初しぐれ
清まさし(静岡県)
- 203 犬を抱き何するでなし秋愁
中嶋清子(佐賀県)
- 204 天高し喜怒哀楽の十周年
大内泰子(東京都)
- 205 秋の夜やモディリアーニの眸失し
後藤しげる(東京都)
- 206 稲刈り了へし足柄の風の濃き
清水勝子(神奈川県)

- 207 香り佳き女隣にそつと花火席
関忠恕(静岡県)
- 208 めいしばい夕日を羽織る懸大根
田中昶(鳥取県)
- 209 天高し湯けむりどんどん豊後みち
松尾らん(東京都)
- 210 熊蟬に力をもらふ東大寺
小山たけし(埼玉県)
- 211 待ちわびし待ちわびて白鳥来る
五十嵐勝敏(新潟県)
- 212 ほのぼのとコスモスに揺れ人に揺れ
友松草薫(群馬県)
- 213 風去りて朝日静かに台風禍
高橋まさ子(宮城県)
- 214 名月や部屋暗くしてねころんで
二瓶邦枝(埼玉県)
- 215 霧襖あけずに入る露天風呂
西口東治(大阪府)
- 216 杜鵑草ネズミは歌う恋の詩
白戸麻奈(東京都)
- 217 図書館に絵手紙映ゆる秋日和
大場さよし(宮城県)
- 218 松手入れして我が蓬髪は手入れせず
梶鴻風(北海道)
- 219 サンタさん鐘の音鳴らし夜をかける
山本理香(大阪府)
- 220 コスモスや白のブラウス似合ひます
武市愛子(大阪府)
- 221 裏木戸に鹿の声して暮れの雨
高垣勝代(大阪府)
- 222 枕辺にハイネの詩集秋燈す
中西秀雄(東京都)
- 223 日曜日静かな空気今朝の秋
山川幸子(東京都)
- 224 幾重にも黄金波うつ稲穂かな
古川正栄(千葉県)
- 225 耳朶を咬む吐息馨し虫時雨
加用章勝(千葉県)
-
- 226 図らずも庭の恵みの零余子飯
山本紀昭(埼玉県)
- 227 ハロウィン店の南瓜の笑顔かな
中村慶子(滋賀県)
- 228 猿軍団紅葉始まるいろは坂
田野井一夫(栃木県)
- 229 楽の音の胸を豊かに秋の風
山崎ゆき(東京都)
- 230 寅さんがやつて来さうな稲穂道
佐藤信(神奈川県)
- 231 つれづれに耳目あそびす秋小鳥
佐野和彦(静岡県)
- 232 権兵衛峠を越えて木曾路の秋惜しむ
那須美言(山梨県)
- 233 家紋入り半被で跳ねる運動会
星一子(神奈川県)
- 234 父の日の父の顔して画かれけり
能條憲夫(神奈川県)
- 235 うす味の大きな波紋やレモン切る
黒岩正子(埼玉県)
- 236 押し歩く自転車女秋薄暮
安部哲(新潟県)
- 237 新薬にどつかと胡坐むすび喰ふ
西川孝子(奈良県)
- 238 あるがまま年を重ねて秋の草
吉田律子(新潟県)
- 239 バイナダー停めて汗拭く嫁御かな
長野操(埼玉県)
- 240 狭庭なる尖りし石や秋の色
山崎紀久江(福岡県)
- 241 卒寿母縫いし作務衣や冬向かう
山田幸代(兵庫県)
- 242 会釈せる木椅子独りの秋没日
小澤田梨(静岡県)
- 243 馬肥ゆるカレーばかりの二日間
油谷郷史(兵庫県)
- 244 正倉院展もの言ひたげな御物かな
今井温子(奈良県)
-
- 245 金木犀香り佳し散るも佳し
恩田八重(神奈川県)
- 246 死までは人その後は草の絮
中岡昌太(神奈川県)
- 247 芭蕉祭翁に続けと子供句
芋木匡子(滋賀県)
- 248 盛蕎麦に紅葉を添える茶店かな
松前邦廣(千葉県)
- 249 投函へ意を決すれば雁の声
有坂馨園(福島県)
- 250 縄文の幻想の森秋時雨
富樫和子(山形県)
- 251 香煙を風が揉み合ふ秋彼岸
重原昇(新潟県)
- 252 「おい」と呼ぶ声がしたよな秋の風
阿部徳夫(宮城県)
- 253 暮れながら輝きにけり秋の空
鈴木みえ(長野県)
- 254 踏みゆけば落葉の音が詩となる
渡辺嘉幸(東京都)
- 255 故郷に思いが飛んでかりんの実
服部八重子(東京都)
- 256 穂芒を風ごと活けて古信楽
西村幸子(滋賀県)
- 257 信楽に古代の絵皿柿繪
中田文子(大阪府)
- 258 今年米まづ隣人にお裾分け
紺谷睡花(東京都)
- 259 括られてより賑やかに秋桜
湯浅芳郎(岡山県)
- 260 ウォーキングの二人いつもの刈田道
小野寺裕子(宮城県)
- 261 石榴の実すつとんきやうに割れてを
小林七重(新潟県)
- 262 歳末の街どの店見ても節の山
西條公雄(埼玉県)
- 263 赤とんぼ無人の地踏む怒りかな
福岡悟(東京都)
-
- 264 鎌立てて枯蟬の身構へり
津布久信雄(東京都)
- 265 鉄柵の中に一株彼岸花
木下精(大阪府)
- 266 露天風呂一茶の里の月仰ぐ
忍正志(兵庫県)
- 267 蟬の穴多き公園徒歩二分
中村康浩(福岡県)
- 268 削除キー押して叩いて零余子かな
北野耕兵(千葉県)
- 269 台風圏影がちぎれてしまひけり
浜田はるみ(埼玉県)
- 270 欲気みな遠ざかりゆく秋しぐれ
岡村君枝(茨城県)
- 271 雲一つ無き大空に望の月
山岸伊久雄(東京都)
- 272 鉄の手の鉄柱を切る神無月
緑川禎男(埼玉県)
- 273 ゆつたりと秋を回すや大風車
杉村美保子(岩手県)
- 274 秋の花白磁の壺と決めて挿す
片山茂子(埼玉県)
- 275 秋拾着て新らしき日を歩む
渡辺由美子(宮城県)
- 276 生涯を古利根に生き山粧う
林多美子(群馬県)
- 277 調教を終へしサラブレッド息白し
中村三千年(三重県)
- 278 通院の車窓いつしか初世
柴田恵美子(北海道)
- 279 老ふたり静寂楽しむ秋の茶菓
中村和弘(愛知県)
- 280 さわさわと水ゆく音や薄紅葉
駒場京子(神奈川県)
- 281 過去捨てて未来に生きよ秋の暮
神作洗江(埼玉県)
- 282 括られる紅紫華やぐ乱れ萩
浦橋克行(兵庫県)

- 283 紅白の萩二鉢に子規偲ぶ
増田公代(東京都)
- 284 亡妻の墓とりかこみ曼珠沙華
森俊彦(神奈川県)
- 285 片蔭や歴史のねむる石畳
萬濃その子(神奈川県)
- 286 栃の実やきょうもどこかで飢えし子
が
佐藤正子(福島県)
- 287 朝顔は実に八十五歳誕生日
井川英子(大阪府)
- 288 秋高し沼津アルプス角立てて
外岡恵子(静岡県)
- 289 根深汁親子で食みて子を諭す
福島信一(埼玉県)
- 290 円空の木肌の筋が脈づてる
小山光恵(栃木県)
- 291 秋祭りお神酒賜わり血が騒ぐ
峯田まり子(奈良県)
- 292 焼栗の香り奥より古本屋
高杉杜詩花(北海道)
- 293 秋雨に恋する肩を触れあはす
堀井酔人(茨城県)
- 294 大根干す十戸の部落は姓同じ
井出甲子雄(長野県)
- 295 野佛に衣させたし初時雨
鏡たか子(山形県)
- 296 後ろから抱かれるように冬に入る
暉峻康瑞(鹿児島県)
- 297 十二月八日父の影よぎる
中野勝子(鹿児島県)
- 298 葛引いて葛に引かれてしまいいけり
井田由利子(宮城県)
- 299 紅葉散る山のかなたに星がふる
内田東三(埼玉県)
- 300 真綿夜具たぐり二度寝の霜の朝
菅原キイ子(宮城県)

10月号の 心に残った作品

「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんのお返答をお寄せ頂きありがとうございました。その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。

※今回の大賞はお二人です。

《大賞》

57 夕月夜あした働く鎌を研ぐ

椋本望生(大阪府)



椋本望生様

・農作業の手順の良さ、誠実さが伝わり、上五で深まりました。落合敏子(北海道)・働ける喜び。いつまでも元気でと声をかけたくなる。辻升人(東京都)・あたり前の日常のよこびと明日への希望を感じます。若月理依子(新潟県)・俳句を作りながら良く働くお父様、尊敬致します。青木ケン子(埼玉県)・明日の希望をもって働く姿が、美しく感じる。岡野智恵子(埼玉県) 他

【自句自解】
狭庭ではあるが、定年退職を機に長さ三メートル余りの短い畝を五本作った。そこは草や蕨が生え、そう簡単ではなかった。一生懸命になっていたら、辺りはもう薄暗かった。ふと納屋を見ると、亡くなった父の使い古した鎌と砥石があった。よく畑仕事をしていた父の姿が頭を過った。せつせと鎌を研いだ。この句は、その時の句である。あした働く。

は畑仕事の準備のためでもあるが、新しい趣味への挑戦の決意でもあった。

《大賞》

213 帰省子の靴ぬぎてより里言葉

小林七重(新潟県)



小林七重様

・故郷のほっとした心境が「靴ぬぎてより」に表現されている。石井美智子(埼玉県)・家の敷居をまたいだ時から「どー」と安心感が出た雰囲気が良い。三津木俊幸(千葉県)・よく情景が見える。津田吾燈人(高知県)・家に帰ってきた安心感と開放感が「里言葉」にでていてよいと思った。石川郁子(埼玉県) 他

【自句自解】

この作品は首都圏の大学に進学した長男がモデルです。帰省の連絡を受ける時、恋人に会うかのように(?)いそいそと新潟駅まで迎えに行くのが私の慣わしです。会った当初の彼は人目もあつてか、言葉少なな標準語。ところが、懐かしの実家に足を踏み入れた途端、夏は「あつちえ(暑い)」「冬は「さーめ(寒い)」の新潟弁に。その後、結婚し夫婦で帰省となった今も相変わらずの第一声。それが可笑しくてそのまま詠んだものです。

《川柳》

26 一針に武運を祈り征きしまま

久本にい地(岡山県)

・千人針の事とします。若い有望の人が亡くなりました。羽田桐柳(群馬県)・戦争の空しさよ。原崇雄(埼玉県)・千人針の事を知っている人も少なくな

りました。戦争は絶対にしてはならない
藤沢健二(千葉県) 他

《俳句》

82 木椅子みな海向く茶房涼新た

清水勝子(神奈川県)

・目の前の海の広がりや秋にむかっている感じがすがしさが感じられてとてもいい
天野直子(神奈川県)・作者の感性の水々しさがとても素敵だと思います
長野光康(神奈川県)・時折白波の立つ広々とした海を目前にいたたくコーヒーは又格別でしょう。季語のとり合せが効果的。小野寺裕子(宮城県) 他

《短歌》

274 原爆の写真集見て泣きし娘の亡き今
もまだ原発やまず

加納昭子(北海道)

・原発災、頭から離れません。江口肇(福島県)・御息女の死と原爆から原発までの悲劇と重ねて未来永却の廃絶を願う想いを歌われた。菅井文男(新潟県)・広島の人々が原爆症で逝き、子供が福島に居るので身につまされます。増島淳隆(東京都)・世界で広島長崎原爆反対です。なくしましょう。竹本惇子(山口県) 他

《他にも》

4 悪餓鬼も年をとったなクラス会

宮崎正男(静岡県)

8 泣きに出てきれいな月に抱かれてる

小山恵美子(大阪府)

13 どこへでも行けと哀しい嘘を言っ

竹村穂夫(大阪府)

25 豊かだが淋しくなったおつきあい

藤井碩子(山口県)

70 被災地に底力あり返り花

井原穂子(東京都)

※今後もふるってご投稿をお願いいたします！

前回のアンケート

Q: 年末年始によくしたお手伝いは?
紙幅の関係上、すべてのお答えを掲載できませんこと
をお詫び申し上げます。

☆餅つき

- ・準備や部屋一面に飾りもち・のしもち・あられ用のもちを一枚一枚広げ
ることを手伝ったものです。
中村和弘(愛知県)
- ・おもちつきの折、小さい餅を丸めた
(下手乍ら) 檜山とり子(東京都)
- ・一家総出で楽しかったことが昨日のよ
うに思います。 中村三千年(三重県)
- ・お餅を箱に並べてきれいに入れる、ご
近所への挨拶回り。
萬濃その子(神奈川県)
- ・つきたてのお餅をまるめたり餡を丸
めてあんころ餅をつくること。
夏目満子(東京都)
- ・のし餅を切り分ける手伝い
石川郁子(埼玉県)
- ・搦き上がった餅を丸くして席に並べ
る手伝い。時々、餅を口に入れなが
ら…。 松田重信(埼玉県)
- ・まあるくなあれ…まあるくなあれ…
と小さき手で一生懸命お手伝い。
佐瀬千恵(神奈川県)
- ・何せ八人家族ですから「十うす」つく
ので朝早くからお昼までかかりまし
た。あの「からみ」餅はうまかったです。
山崎吉晴(群馬県)
- ・餅つきの火の番 伊東修愚(静岡県)

☆大掃除

- ・特に窓拭き、畳を布で拭き、その後
から拭きです。じわつと爽快感が出
てきます。 布目雅之(東京都)
- ・猫の手を借りたいと言われたら手伝
いするしかありませんから。
北村純一(神奈川県)
- ・お墓の掃除 川崎洋吉(福岡県)
- ・ガラス拭き、障子貼りの紙持ち役
早矢仕邦夫(愛知県)
- ・釜戸のスス掃除(戦後までお釜で飯を
炊いていたのでかなり黒かったことを
思い出します。) 北岡保興(愛知県)
- ・お正月が待ち遠しくて競争のように
拭き掃除したものです。
木村美智穂(埼玉県)
- ・掃除・鍋磨き 三浦博(岩手県)
- ・窓・廊下などの掃除。神棚のしめな
わづくりの手伝い。
石尾曠師朗(東京都)
- ・足手まといになるので、ほとんど家の
入口、庭、後ろの小室などを箒でお
掃除。年始めは、のんびり自室で「少
年画報」を読んでいたと思います。
鈴木岑夫(千葉県)
- ・仏さん(佛壇)の中の各種仏器がき。
真鍮みがきでピカピカにしました。
長野光康(神奈川県)
- ・祖母が丸餅がもめないとお嫁に行か
れないと口ぐせに云っていました。今
は感謝しています。
堅田秀子(東京都)
- ・沢山のモチを母と切った事。あの頃は
正月のみのモチ。美味しかった。
岡弘子(埼玉県)他

☆料理

- ・畳ふき、廊下ふき、冷たさで手にし
もやけができました。
矢野絹枝(東京都)
- ・畳を持ち上げて干して夕方ポンポン
たたいて新聞紙を敷いて元の様におく。
そして雑巾で拭くのが役目。
佐伯セツ子(香川県)
- ・畳掃除、畳をあげて干すので畳のない
部屋が新鮮に見えて、なつかしい年の
瀬でした。 増島淳隆(東京都)他
- ・お節会料理と正月飾り。今も続いて
おります。 環順子(東京都)
- ・せつせとかつお節をけずりました。
母は手をけずらないかとハラハラして
いたようです。 増本和子(大阪府)
- ・子供の頃多人数の家でしたのでごほ
うのキンピラ作りをさせられました。
竹内ハヤ子(埼玉県)
- ・新潟の郷土料理の「べ」に入れる里イ
モの皮を何十個もひたすらむいていた
少女時代の私。
若月理依子(新潟県)
- ・おせちのお味見と、きれいにおせち
をお重に詰めるお手伝い。
大橋絵代(千葉県)
- ・母が作るお節料理のお手伝い。特に
さんとのん裏漉しは懐かしい思い出
です。 矢島多恵子(東京都)他



☆家業の手伝い

- ・メッキ業の父が同業者等に年始挨拶
するときに、年賀手ぬぐいを風呂敷包
みにして供をした。
齊藤安弘(神奈川県)
- ・家が和菓子屋だったので三十日は賃
餅配達を自転車で行くまでした。
羽根田明(神奈川県)
- ・父の工場の手伝いをして納期に間に合
わせた。 神一男(静岡県)
- ・田舎町で食品荒物雑貨店を営む父の
手伝いをした年末年始でした。
近藤薫也(千葉県)
- ・母が衣料品のお店を経営していたの
でお手伝いをしないとお年玉をもら
えませんでした。
福田和子(東京都)他
- ☆何もしない
・お手伝いの経験はなし(父母に大切に
されていたから) 今井忠一(東京都)
- ・お坊ちゃんでした！特に手伝いの記憶
はありません。 鈴木蝶次(宮城県)
- ・何にもせず読書少年でした。
山東爺(北海道)他
- ☆子守り
・11才年下の弟をおんぶさせられまし
た。背が伸びなかったのはその所為
だと母をせめた？事がありました。
大内泰子(東京都)



A Q U E S T I O N N A I R E

・七人兄弟の長女、兄弟の面倒を見ることでした。尾形時栄(静岡県)
 ・弟の子守り、背負うとボカボカ温かかった。井上静夫(栃木県)他

☆おもちを焼く
 ・お正月の「ぞうに」のおもちを焼くこと。三津木俊幸(千葉県)
 ・おもち焼担当ですぐ上の兄と二人で競って焼いていました。有島和子(東京都)

・新春の雑煮用の餅を全部半分に切って火鉢で焼いたこと。三ツ木宗一(東京都)他

☆正月飾り
 ・小正月、一月十五日のダンゴの木に餅とフナセシベイを飾った事です。鏡たか子(山形県)
 ・床の間への松飾り 千代田栄次(東京都)

・おばあさんが作った繭玉を座敷一杯の木の枝に吊る。その楽しかったこと。西口東治(大阪府)
 ・華やかに正月飾りの取付を手伝うことがよるこびでした。それは座敷の天囲一面の木の枝にピンポン玉大の餅団子、自家製煎餅、みかん等を飾ることです。藤井春三(埼玉県)他

☆神棚
 ・神棚、仏壇のお清め。相馬竹浪(新潟県)
 ・神棚の白いヒラヒラの紙作り 松尾らん(東京都)

・神棚、佛壇の柿やお花を買いに行くこと。石戸幸子(埼玉県)他
 ☆障子
 ・古障子洗い。(近くの川で) 暮の冷たい水、冷たく重かった(運ぶのに) 内田稔(埼玉県)



・毎年年末に張り替えをしていたのでそれを手伝えました。関原幸子(東京都)

・紙を破って水で洗いメリケン粉ののりで張る仕事、寒いのでイヤでした。濱崎祥子(鹿児島県)他

☆雪掻き
 ・屋根の雪おろしの思い出が印象からはなれない。佐藤朗々(東京都)

・出生地が大雪の古谷村でしたので家の入口の除雪です。入口へ雪の階段を作り入ったと云っても今は誰も信頼しないでしょう。吉澤昌美(長野県)

・雪の多い長岡で過したのでやはり早朝の玄関から道路迄の除雪です。鈴木章(新潟県)他
 ☆遊び
 ・「テレビ」がなかった時代「双六」を友達とまた家族で楽しんだ。石原岳(群馬県)

・お正月家族でする百人一首。幼いながらいつも読み手をさせられおかげで上の句ですぐ暗唱できます。高崎登喜子(東京都)
 ・竹馬、ソリあそび。尾股清一(福島県)

・料理の邪魔をしないようひたすら外で遊ぶ。木村誠一(神奈川県)
 ・凧あげ、双六、福笑いでしょうか。藤沢健二(千葉県)他
 ☆薪割り
 ・薪割り、一日当り七十束 小野登喜雄(群馬県)

・戦後まもない頃、小学生で薪割りとフロたきなど今では想像も出来ないことだらけ。近藤富夫(東京都)
 ・マキと草(燃料・牛のえさ)。手伝いではなく本業だったみたい。村岡盛英(群馬県)他

☆お買いもの
 ・夕餉のお菜の材料など母に言われて近所のお店へ。井川英子(大阪府)

・買い物について行き、荷物を持たされる。中田文子(大阪府)
 ・買い物かごを下げ、母と手をつなぎ、お正月用品や食料品を何回も小さな市場に買いに行きました。増田公代(東京都)他

☆門松
 ・近くの山で父の切った松をかついで帰り、父が門松に立てるのを手伝った年末の思い出。関忠恕(静岡県)
 ・年末の門松を飾る父の手伝い(邪魔したのかも?) 大谷茂(埼玉県)他

☆その他
 ・蜜柑園の蜜柑もぎ 中本至(神奈川県)
 ・雪踏み(今と違って雪は捨てずに藁沓で踏んで道を作りました。) 田中豊恵(新潟県)

・1/1生まれの小生、子供の頃は親が、現在は子や孫が顔を揃え誕生会を行ってくれます。うれしいことです。藤井北灯(福岡県)

・おやじが大事に使っていた自転車みがき 北野耕兵(千葉県)
 ・お風呂の湯沸し。林勝洋(神奈川県)
 ・毛のこげる匂いがするにわたりの毛をむしりとる係。中村康浩(福岡県)
 ・芋洗い。正月用に縁側いっぱいに干したものです。吉村充治(埼玉県)

・井戸が離れていて、水くみの手伝いをしたことを思い出しました。江口肇(福島県)
 ・一年間育てた鶏の首をしめ羽をむしること。美濃部紘三(新潟県)
 ・奥庭で採取した「サフラン」の陰干しを葉研で粉末にする。古谷力(東京都)

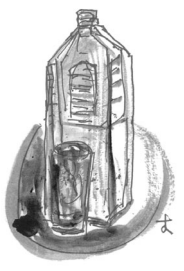
・お膳、食器、母が洗ったのを手伝いながら正月の行事の様々な話を聞くのがたのしみでした。木村舩(山形県)
 ・街の小さな郵便局で年末どつと持ち込まれる郵便物にスタンプを押す手伝いを。十歳ぐらいました。中澤寿美(神奈川県)

・垣根の補修 坪田勝秀(鹿児島県)
 ・魚屋のおじさんの手伝い。配達とか品物を運んだりしました。新井賢(埼玉県)

・鏡餅のお飾り、お箸紙の名前書き、年賀状の当選さがし、お鏡のカビ取り等。奥那於子(大阪府)
 ・熊手を持って山へ行き枯松葉を集めて家に運ぶこと。岡村君枝(茨城県)

・五十メートルの坂道を、飲み水、風呂水用に天秤で十回ほど(現在は水道) 黒澤正行(福島県)
 ・高校時代、一二〇〇円の月謝を電力検針のアルバイトで払いました。早坂紘司(北海道)

・氏神様の土台の泥をぬる(こと)です。坂本正夫(千葉県)





・雪の上での畳叩きと年末料理用の野菜を雪中の土囲いから取り出すこと。

中岡昌太(神奈川県)

・冬は薪運び、家畜の干草切などの想い出があります。寒くて寒くて泣きました。樹氷の美しさ、雪原の美しさは心の宝物です。

落合敏子(北海道)

・山羊を飼って居りましたのでかごにいっぱい草刈りをさせられた事が忘れられません。 鷺谷浅子(茨城県)
・親・母が出してくる納豆をかきまわす事。 小暮昭司(群馬県)

・川水をくんで風呂に入れる事毎日。 芋木匡子(滋賀県)

・村の鎮守様に正月飾りのおメをスキーで配る。10ヶ所ぐらい。 林多美子(群馬県)

・鶏のえさ作りが私の役でした。近所に雑草を採りに行き、残飯や雑穀類ときざんで混ぜて与えました。 渡辺由美子(宮城県)

・二日の買い初めです。カルタ、トランプ、雑誌などのおまけを頂くのが嬉しかったです。よい思い出です。 田澤宏(新潟県)

・日の丸を玄関口に飾ることが役目で早起きが面倒だった。 松尾健二(千葉県)

・畑の麦踏み 内田東三(埼玉県)

・年末年始のお道具揃えの手伝い。 菅原茂子(宮城県)

・仏壇のそうじ。庭のシラス(白砂)まき。モチまるめ。

石神紅雀(鹿児島県)

・年始客への料理運び。そこにはお年玉目当てという下心も。(笑)

小林七重(新潟県)

・年始、大阪では一日の朝は男子が行事をするので弟が若水くみ、火入れ、神棚をさせられ可哀想でした。

中山日出子(大阪府)

・年末に庭に「白い砂」をまきます。九州が原産地で雪に見立てたか。邪気を払うのか? 福岡悟(東京都)

・年末年始だけでなく小学生の頃から新聞配達をしていました(生活の為)

辻升人(東京都)

・父の団体関係の連絡係りでした。メネを取る習慣もこの頃必要にせまれ身につきました。

佐藤正子(福島県)

・長屋門の清掃、縄の作製、戸障子の清掃、張替え作業、玄関、廊下の清掃、餅つき三斗ついた。

青木日出男(群馬県)

・近くの神社まで杉葉払いに(風呂のたきつけ用)ついでに犬の散歩も。 どうしたらみんなが幸せになれるかを考えていました。

井田由利子(宮城県)他

春山夏子(東京都)



挿絵 須澤重雄

新潟ぶらり

メディアアシップ そらの広場

新潟駅の万代口をでて、まっすぐ歩いていく。十分もすると萬代橋につく。そのたもとに着岸しているのが、メディアアシップだ。

メディアアシップは、今年(二〇一三年)四月にオープンした「新潟日報」の本社機能を有する高層ビルで、この最上階(二〇階)が展望スペースとして開放されている。

エレベーターが最上階に到着すると、「わあー」という歓声がきこえてきた。ちょうど日が傾いてくる時間帯。建物が西日をうけ、きらきらと輝いている。なんて、きれいなんだろ。夜景もいけれど、短い時間しか見られないこの景色はきつと貴重だ。

当スペースの高さは約百メートル。高すぎず、低すぎず、斜面都市に似るような感じでもちを俯瞰できる。しかも三六〇度ぐるりと展望可能。時計回りにまわっていった。

やはり最初に探すのは海である。初冬の日本海がみえた。まだ、青い。新潟港にはフェリーがとまっていた。佐渡汽船だろうか。視線をうつすと、飛行機がとんでいくのがみえた。高層ビルの朱鷺メッセをかすめるように、首をあげぐんぐん高度をまわっていく。どこに行くのかな。札幌かなあ、福岡かなあ、それとも外国かなあ。じーっとみつめていたが、やが

て雲のなかに消えた。

東区の工場地帯では、赤と白の縞の煙突がもくもくと煙をはいていた。飯豊連峰のほうには、青黒い雲がかかっている。虹がかかった。うつすらとした冬の虹だ。鳥屋野潟方面をみると、サツカーの試合を控えたビッグスワンスタジアムが、灯りをつけていた。——これで一周。ちょうど日が沈むところ。夕日をカメラにおさめようと、大勢の人がガラスに張りつき、同じ格好でカメラを構えていた。そうか、うつくしいと思う気持ちが一瞬なのだ。同じ船に乗る人に、急に親しみを覚えた。(菅真理子)



設計のコンセプトは「現代の北前船」。1階から4階までが船体、5階から20階までが帆に見立てられている。(右の写真)

■新潟日報 メディアシップ 〒950-8535 新潟市中央区万代3-1-1 025-385-7111

第32回目の今回は、江葉恭子さまよりバトンを託された山形誠司さま。
一般的に言われている景勝地。果たしてガイドブックに書いてあることだけが本当なのか否か。
ご自分で確かめて、検証する。こんな旅もいいものですね。

●お客様の『リレーエッセイ』

羽越本線上り線

山形誠司

(埼玉県・さいたま市)

新潟県の新津と秋田を結ぶ羽越本線は日本海の景色を堪能できる幹線として御馴染みである。単線と複線がめまぐるしく交錯することも羽越線の特徴である。急峻な山が海に迫る複線区間で、上り線は屈曲する海岸線を避け山側をトンネルでバイパスする部分もある。そのため奇岩奇石が続く日本海岸の景色を眺めるには下り線に乗るに限るといわれる。このように指摘されると、上り線からも優れた海岸風景が展望できる箇所があるのではないかと、探して見たくなる。そこで九月上旬、秋田から新潟方面に向かって羽越本線の車窓探訪に出かけた。

とかく海へと目が行きがちの羽越線の車窓だが、陸側の景色も見べきところは多い。中でも象潟きさかた付近の景色は素晴らしい。古来歌枕の地として知られ、松尾芭蕉が訪れるなど風雅みやびお士たちの風景巡礼の聖地であった。江戸時代後期に発生した地震で陸地に変わり、かつての入江は水田となっているが、在りし日の面影は保たれている。

金浦このうら駅を過ぎ象潟が近付くと、溶岩の尖塔を乗せた鳥海の高峰が迫ってくる。裾野が広く壮大である。やがて青波打つ稲穂の海原に点在する海松色の小山の群れが見えてきた。「象潟九十九島」は車窓にも鮮やかに展開する。一八〇四年の地震後、一時藩の施策による新田開発が進み景勝消滅の危機に瀕したこともあったが、当時の象潟かみん紺満寺住職・覚林和尚の命懸けの保全運動の甲斐もあって、名勝

は後世に遺された。ナショナルトラスト運動の魁のような行動である。風景の美しい地域からは偉人が現れるものである。

さて見所満載の羽越本線ではあるが、今回は上り線の海岸風景にどこか優れた場所はないかと着目してみたわけである。そして間違いない上り線の方が好い、と思われる場所があった。そこは鼠ヶ関ねずがせき（府屋間にある。山形・新潟県境地帯の海岸に迫る山をトンネルで潜り抜け府屋駅に近付くと、何時の間にか上り線は下り線より高い位置を走っている。そこからは粟島が日本海に浮かび上がるようにおおらかに望まれ、僅かな間だが耽美な遠景を觀賞できる。こうして見ると上り線の海岸風景も捨てたものではないことがわかる。もともと景勝地帯「笹川流れ」の核心部分、越後寒川〜今川〜桑川間は単線であり、海岸風景を楽しむのに、上り線、下り線はあまり気にすることもない、ということも出来る。

ちなみに羽越本線は単線区間に景勝が多いように思われる。秋田・山形県境付近の鳥海山の裾野が海と接する上浜〜小砂川こさか〜吹浦間などは幹線が走る場所とは思えないほど荒々しい風景が広がる。ここは、羽前浜街道最大の難所・三崎峠の側を通り抜けている。特に、小砂川駅の北側には、羽越線では珍しく鐵路が道路より海側を走る区間があり、格別に迫力がある。

羽越本線は平野と海岸の出入りを繰り返すので、車窓探訪を目的に乗車するなら「上り」「下り」に拘らず、それぞれの景勝地点を事前に確認しておくことをお勧めします。



感謝、感謝、ありがとうございます！

10月10日に10周年を迎えたということで、皆さまより温かいメッセージ、電報、お祝いを頂戴し、本当にありがとうございます。アンケートハガキの返信数も、大幅アップの過去最高。笑顔いっぱい、胸いっぱい。改めて皆さまのお気持ちに感謝いたします。これからも頑張りますので、応援のほどよろしくお願い致します！

無事引っ越しました

10周年と機を一にして、道路を一本隔てた場所は無事引越しを終えました。おかげさまで以前より快適に仕事をしており、より一層のお役立ちをめざします。お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください。



須澤重雄さまの新しいポストカードを発売！

毎号、「喜怒哀楽」の挿し絵をお描きくださる須澤重雄さま(P5参照)のポストカードが新しくお目みえします！12月号では「冬シリーズ」をご案内いたしますが、今後一年で春夏秋冬32枚のポストカードが登場予定です。

絵の色もレイアウトもバラエティに富み、用途によって、送る方によって、様々にお使いいただけるほか、写真立てに入れれば素敵なインテリアとしてもご利用いただけます。今回同封したのは、国の重要文化財に指定されている「松本の旧開智学校」。他、水鳥、椿、サンタクローズ等、計8枚入りで1セット1,000円です。ぜひ、この機会にお買い求めください！



従来のポストカードも好評発売中！

前回まで、毎号同封していた花や静物を中心としたポストカード。こちらも、従来通り1組8枚入り500円で販売しています。変わらぬご愛顧のほど、よろしくお願い致します。

★上記ポストカード2種のお申込みは、いずれも同封のアンケート用紙にご希望の種類、セット数を明記のうえ、必要金額分の切手を同封のうえ封書にてお申込みください。

情報をお待ちしています

6月より新しくなった当社ホームページ、または「喜怒哀楽」紙面で、俳句・短歌・川柳の大会告知、作品募集等の情報を掲載いたします！郵送、ファックス、メールのいずれかでお寄せください。



●食に関するミニエッセイ「滋味しみじみ」の原稿を募集しています。400～500字の原稿をP16下記の宛先に封書かメールにてお送りください。勝手ながら採用の可否については、弊社に一任させていただきます。おいしいお話、大歓迎です!!

「2014年手帖」 「ご縁ブック2013」をお送りいたしました

「2014年手帖」「ご縁ブック2013」を12月第1週に発送いたしました。まだ、お手元に届いていないという方はお手数ですがご連絡ください。

スタッフの一言

Q. 年末年始によくしたお手伝いは？

※本年2013年もご愛顧いただき、ありがとうございました。

木戸 敦子



新潟名物「のっぺ」に入れる银杏の皮をチマチマとむく、数の子の白い筋を延々ととる、のし餅を曲がりながら切る、父と本町にゴイ(黒くわい)とナマコを買いに行き帰りに年一回のパチンコ! 特別な時間だったな～。

古川 久美子



特に、何も……。年末、親戚の家に滞在していたことがあったので、その際は、窓ふきなんかをお手伝いさせていただきました。

菅 真理子



「プリントゴッコ」をつかって年賀状づくりのお手伝い。素材を組み合わせて原稿をつくり、製版して、インクをのせて…家族みんなで作っていました。たのしかったですな。

山田 千秋



まだ幼稚園に通う前だった頃、障子貼りを手伝うというより横でじーっと見ていました。たぶん、障子に穴を開けたのは私で、それを見て、注意しなくてと学習したのかもしれない。今では大人になって、障子貼りも上手になります。

木伏 美恵



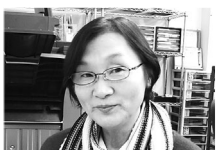
小学生の頃から、いとこ13人分のお年玉を袋に入れる係。お兄さんお姉さんには大人っぽい袋で、小さい子にはかわいい絵柄で…と自分なりに考えて、そして私の分には母が多めに入れてくれた。

上村 真智子



小学生の頃、大晦日にウキウキしながらガラス拭きをしつつ「お正月って楽しいよね」と母に言ったら「お正月とお盆は大嫌い!」と言われた。本家だったのていろいろ大変だったんだろうな～

金子 ゆり子



父親が年末になると部屋ごとにある障子貼りをしていましたので、一緒にやりました。おかげで障子貼りを覚えて、我が家では私が障子貼りを担当しています。年末でなくお盆にやります。

石山 由希子



やはり大掃除でしょう。冬休み真只中。こたつでゴロゴロが楽しくてしかたない冬の朝に雑巾を渡されて、しぶしぶ拭き掃除をしたものです。でもやっているうちに気持ちよくなって体も軽くなりました。

吉田 瞳



実家の仏具をKURE 5-56カピカールで磨く手伝いをしていました。今は息子が興味津々で磨いています。ピカピカになった鈴を兄妹並んで鳴らして手を合わせて拝んでいます。



2歳3ヶ月。親戚の結婚式でおめかしして、素敵なレディーに☆



雪国同盟

北山あさひ

北山さまの最終回のエッセイは、愛憎半ばする雪国に対するフクザツな心境。南に住む方にも「雪」にかわる別のものがあるのでしょうか。次回からは歌壇賞を受賞された女性歌人。北山さん評は「とても穏やかで優しい方ですが、歌会では的確な批評をされてかっこいいです」。

雪が憎い。北海道のほぼ半年をその冷たさと暗さで閉じ込めてしまう雪が憎い。花も樹も動物も、雪の前ではその弾けるような野性を抑え込み、ただ春の到来を待つ他ない。人間もそうだ。人々は朝のまだ暗いうちから雪かきという過酷な労働に追われ、ときには冷気に指先の感覚を失いながら登校・出社しなければならぬ。スキーやスノーボードなどのウィンタースポーツは冬の貴重な娯楽のひとつと言えるが、中学のときにスキー授業で訪れた「小樽・天狗山」で遭難しかけた私にとってはトラウマ以外の何物でもない。雪が憎い。冬が憎い。四年に一度くらい北海道と沖縄をばくりっこしたい（北海道弁で交換するという意味）。その気持ちは年々深まるばかりである。

ここに一首の短歌がある。

体温計くわえて窓に額つけ「ゆひら」とさわぐ
雪のことかよ 穂村 弘

恋人たちだろうか、窓辺でくつろいでいる二人。女性のほうは風邪をひいているのだろう。体温計を口にくわえ、熱っぽい体で窓の外を見つめている。窓辺にはほんのりと冷気が漂い、火照った頬にきつと心地良いだろう。そうしていると、ふと、雪が降ってくる。彼女は雪の降らない場所の住人なのか、窓に額をくっつけてこう叫ぶ。「ゆきだ！」しかし体温計をくわえているのでその言葉は明確に発せられず「ゆひら」となり、男性はそれに対しこう思う。「ゆひらって何だよ。雪のことかよ」

憎い。雪を見てはしゃぐなんて憎い。彼女は雪の美しさしか知らない。猛吹雪のスキー場にひとり取り残された恐ろしさを知らない。そしてこの男は何だ。聞こえるぞ、「雪のことかよ」と突っ込んだあとの「可愛いな、コイツうー」という心の声。なんだなんだ。ゲレンデが溶けるほど恋してるのか。幸せは冬にやってくるのか。

窓の向こうの冷たい雪、鼻声で「ゆひら！ゆひら！」とはしゃぐ女の子がいる体感的にも心象的にも暖かな空間、それをキヤッチーに詠んだこの歌を、私は初雪を見ると必ず思いたす。と同時に、この「ゆひらちゃん」に意地悪したくなる。「これは私たちの雪だ」と、そう主張したくなる。雪は憎い。嫌いだ。でも、私はゆひらちゃんに雪を渡したくない。雪国の人にしかわからないあれやこれを、秘密にしておきたい。

夜じゅう雪が降り続くときのあの静けさ。街灯が雪に反射して窓の向こうがオレンジ色に染まる少し怖い感じ。朝、雪かきをする人々の勇ましいこと。お気に入りのセーターや手袋。暖かなココア。雪の道に踏む真っ赤なナナカマドの実。真夜中の除雪機たち。ひんやりとした鍵、手紙。おじいちゃんの凍った眉毛。湿った雪が樹の枝にくっついてきらきらと輝くこと。真っ赤なほっぺた。

これらを全部秘密にしませんか。雪国に住む私たちだけの秘密に。いや、嫌いです、嫌いですよ雪なんか…。でも、雪国に生きているということ、何となく、少しだけ、自慢にも思うのです。

ゆひらちゃん、今年も雪が降りました。

おかげさまで
引越しまで
完了しました！

2013. 12. vol.71 (2013年12月10日発行/隔月発行)
●発行・印刷/株式会社ミュージック・コーポレーション
〒950-0801 新潟市東区津島屋7-29
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550
0120-819-395
e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com
郵便局口座番号 00530-4-81370 口座名 株式会社ミュージック・コーポレーション

編集後記

P11 への「よしたお手伝い」の欄を読み、私も見よう見まねで家業の手伝いをしていたことを思い出す。その家々で習わしがあり、しきたりがあった。クリスマスツリーを飾る時の高揚感、こたつでみかんに年賀状、お屠蘇に着物に風揚げに。年末年始の特別な時間は色褪せずに心に息づき、支えとなっている。大なり小なり自分と関わり、周囲にいた今は亡き人たち。点と点が結ばれ、今ここにある。そのおかげと
思っているのなら、同じように今関わる人たちに感謝の倍返しをしなければ。いつするの!? 今でしょ!
はい、幸せは向こうから勝手に訪れません。来年もスタッフ一同「笑う門には福来る」で!(木戸敦子)